



Title	<書評>横川公子編『服飾を生きる : 文化のコンテクスト』
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 126-128
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53111">https://doi.org/10.18910/53111</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『服飾を生きる — 文化のコンテクスト —』

横川公子編 太洋社 1999年3月20日

羽生 清/京都造形芸術大学

本書は、服飾を文化のなかで捉えなおそうとする書物である。冒頭で編者は「服飾文化を対象にした分野には、歴史的な見方をはじめ多くの取組みがすでにあります。本書は、そういう現状にあって、改めて文化学としての服飾研究を取り上げ、新しい見方や考え方をのべたものです」と語る。

身体保護以前に存在した身体装飾でもある服飾に関して、これまでは、歴史や形態から、あるいは物理的な視点からの研究が多かった。最近では哲学から服飾を読み解く研究も盛んである。しかし、服飾を総合的に文化の視点から見ようとする研究は新しい。実際、古典を読むとき、いや古典文学に限らず明治文学でさえも、その時代にどのような衣裳を身につけていたかを知らずには登場人物の心を理解出来ないにもかかわらず。

今、このような書物が生まれたことは有り難い。それぞれの章は、それぞれの書き手によって、さまざまな視点から論究されている。書物を読みとおして感じたことは、貴重な知識を得たことに対する感謝と、服飾について語ることは書き手の生き方を表現することでもあるという感慨であった。

さて、内容の紹介に移ろう。本書は、二部構成になっている。第一部は「服飾研究の問題点」と題されており、一章は「服飾を生きる」二章は「服飾研究の資料—資料の読み方」三章は「たのむ・つくる・着る—発注者・制作者・着用者」。第二部は「服飾研究の展開」とあり、一章は「服飾をつくる」二章は「服飾を着る」三章は「服飾と性」四章は「服飾と産業」五章「服飾と伝統」。

第一部一章「服飾を生きる」から見てゆくと、最初に、昨夏から街に溢れ出した、かつて下着として着ていたスリッソックりのドレスが話題となる。編者でもある筆者は、この流行について「皮膚感覚や視覚的な味わいに、何かしら変化の兆しが生まれているようである」と書く。この姿勢は、「最近の若者は、はしたない」などという世俗の評とは違い、若者に対する温かな眼差しと時代に対する読みの確かさを感じさせる。

では、文化としての服飾の枠組とはどのようなものなのか。編者は次のように言う。第一に服飾は、自分自身の存在と切り離せない皮膚感覚的なしかけである。次に服飾の多様性について注目しなければならない。第三に服飾は、いかに自己表現にこだわろうと、見る人の理解を考慮に入れて表現される社会的なしかけである。

文化として捉えられる服飾研究は、過去を参照して終わるのではなく、現在が分析され、未来への展望を含む。この姿勢は本書の最後まで共有される。最終章最終節「国際化ファッション」のなかでは、「これまでの視点では、現代的要素が入り込んでいる事象は、好ましくないものと処理されがちで、研究対象から排除されてきたことは否定できない」とした上で、文化人類学の方法を用いることによって、伝統の現在を捉えようとする。

第一部二章では資料の読み方が提示されている。文化の全体に関わる服飾の資料は、実に多い。それをどのように読み解くか。ここに知的冒険が存在すると同時に、独善的な結論に結びつく陥穽もある。そのような危険を

避け、より深い洞察が如何にして可能か。論者の視点は示唆に富む。

二章二節「ディズニー映画の『読み方』」では、ディズニーのアニメーションを資料として服飾が考察される。描かれた服飾が中世風でありながら、作られた当時の流行を巧みに取り込んでいる「白雪姫」や「シンデレラ」が着ていた衣裳については本書を読んで成程と納得し、かつて観た映画のシーンが次々と目に浮かんだ。服飾研究には、このようにさまざまな視点から文化を見直す新鮮なアプローチが残されている。

また、二章四節では日記や記録など第一次資料に対して、文学を第二次資料としてきたこれまでの研究に疑問を投げかける。「日記だから真実であるとは限らないし、文学作品だからうそだ、つくりごとだ、と決めつけることもできない。服飾に対する人間の複雑な心情を知るためには、文学作品のほうが資料として優れているとする考え方もある」と展開し、「現実とはひと通りではない。現実には何通りもの現れ方があり、何通りもの側面がある。そのように考えると、資料のなかに優劣はない。ここで重要なことは、書いた人の主観を排除してはならないということである」と書き進む。ここには、客観というものが絶対視されてきたこれまでの学問に対するしなやかな挑戦が窺える。

三章三節「手づくりと着用」では、作る人と着る人の関わりが論じられている。「一般大衆の衣生活における『誰がつくるか』の問題は、単によいデザインでよい質のものをつくるということだけではなく、蓄積された生活の知識の深さ、技術の深さにかかわることであった。」つくり手のおばあさんの名前が知られていたとしても、現代のデザイナーとは異なり、上手につくる無名の人で、「ためつすがめつ眺めるおばあさんの視線のなかで、

小切れはいきいきとしたライフスタイルに裏打ちされ、息づいていた。小切れは、生活を組み立てる思考と習慣のパターンに、がちり組み込まれていたのである。」ここに「つくる・着る」を通して伝承されていた、かつてわが国にあり今は無くなってしまった教育の形を垣間見る思いがする。

第二部二章一節「着つける」では、井原西鶴の作品から「目立たないこと」「中程」「派手でない」「忍びやかなる」「分際相応」「季節に応じた」など、当時の町人の服装が、現代の仕事着、サラリーマンのスーツと同様の様態であることが理解される。

これが現代、若者のファッションになると、二章三節「見せる」に論じられるように変化する。「従来のコーディネートの常識を破ることで他人との差別化を図ろうとしている。その参考とするためにトータルファッションを重視するモード誌ではなく、街に出て、他人のファッションを観察することが行われるのである。」「ストリート系を含むファッションがコミュニケーションとなりうるのは、現在、物質文化を第一義とする考え方が社会の大勢を占めている結果といえよう。そのなかでとりわけストリートファッションの着装は、自己満足の域をこえ、『服飾を見せる』ことに最大の力点をおくものとなっている。」このように服飾が、コミュニケーションにおける表現や共感の手段として重要な役割を担い、文化のなかで新しい意味を持ち始めた現状を指摘する。

さて、本書について語り終えるまえに、第二部三章「服飾と性」の問題について触れなければなるまい。ジェンダーという概念の導入により、新しく見えてきたものが多い。一節「文学と図像によるジェンダー論」では、ズボンが家長権の象徴であったことが明らかにされる。ルーアン大聖堂などに見られる

「ズボンをめぐる争い」は夫婦間における家庭内での権力争奪戦を表しているという。

ジェンダーの問題は、そのまま近代国家形成と深く結びつく。二節「『女と男』から読む服飾文化」において、ジャポニズムの服飾が女物ばかりであったのは、着飾るのは女だけであったという理由のみではなく、そこに（中心＝西洋＝男性）対（周縁＝東洋＝女性）という関係があり、前者が後者を「再構成し、威圧する」構造になっていたからである。「侵略の危機にさらされていた開国前後の日本においては、洋装は権力の中核にいる男と制服など公式の服から始められた。ジャポニズムの服飾が女と室内着に見られたのは、みごとに対照的である。」このような国家と産業の関わりについての研究は、四章につながってゆく。

四章二節は、女性教育のなかの服飾を取りあげ、それが如何に国家的使命と結びついてきたかを明らかにする。「伊藤博文とベルツ博士のあいだで鹿鳴館の洋装をめぐる、政治的判断を優先して承認するか、美的評価の面に注目して反対するか、の議論があったことはよく知られている。このときの洋装はその後鹿鳴館熱の冷めた段階では、宮中を除いて消えていった。これらの経緯に見られるように、明治期は教育の場で着る衣服が、国家の要請と結びついていた典型的な時期である。」

十人の研究者によって書かれた本書は、一貫した意図が明確で、しかも個々の研究が刺激的だ。服飾だけでなく、デザインの全体が文化の枠組のなかで、再構築されることが求められる今、貴重な本の誕生を喜びたい。同時に、文化として服飾を語る本書の続編を期待したい。